

神に呼び出された青年

[聖書]エレミヤ書1章1～13節

エレミヤの言葉。彼はベニヤミンの地のアナトトの祭司ヒルキヤの子であった。主の言葉が彼に臨んだのは、ユダの王、アモンの子ヨシヤの時代、その治世の第十三年のことであり、更にユダの王、ヨシヤの子ヨヤキムの時代にも臨み、ユダの王、ヨシヤの子ゼデキヤの治世の第十一年の終わり、すなわち、その年の五月に、エルサレムの住民が捕囚となるまで続いた。

主の言葉がわたしに臨んだ。「わたしはあなたを母の胎内に造る前から、あなたを知っていた。母の胎から生まれる前に、わたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた。」わたしは言った。「ああ、わが主なる神よ、わたしは語る言葉を知りません。わたしは若者にすぎませんから。」しかし、主はわたしに言われた。「若者にすぎないと言ってはならない。わたしがあなたを、だれのところへ、遣わそうとも、行って、わたしが命じることをすべて語れ。彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて、必ず救い出す」と主は言われた。主は手を伸ばして、わたしの口に触れ、主はわたしに言われた。「見よ、わたしはあなたの口に、わたしの言葉を授ける。見よ、今日、あなたに、諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植えるために。」

主の言葉がわたしに臨んだ。「エレミヤよ、何が見えるか。」わたしは答えた。「アーモンド(シャーケード)の枝が見えます。」主はわたしに言われた。「あなたの見るとおりだ。わたしは、わたしの言葉を成し遂げようと、見張っている(シヨーケード)。」主の言葉が再びわたしに臨んで言われた。「何が見えるか。」わたしは答えた。「煮えたぎる鍋が見えます。北からこちらへ傾いています。」主はわたしに言われた。北から災いが襲いかかる、この地に住む者すべてに。」

[序] 預言者エレミヤの登場

私たちは、5月に旧約聖書の預言者イザヤを学びましたが、今月はエレミヤの予言を学びます。エレミヤ書の書き出しによれば、彼は南王国の都エルサレムから北東5～6km離れた小さな村アナトトに暮らす祭司ヒルキヤの子です。北王国がアッシリアに滅ぼされてから約68年後の紀元前650年頃に生まれたと言われていています。そしてヨシア王(BC640～609)の治世第13年(628)に神さまから預言者に立てられました。イザヤより114年程後輩の預言者、しかし釈迦よりも100年近く昔の人です。聖書の世界は仏教よりもずっと古いのですね。

1章の3節によりますと、彼はゼデキヤ王の治世11年(587)にエルサレムの都がバビロンによって落城し、南ユダ王国が滅び、主だった大勢の人々が捕囚となってバビロンに連れて行かれる迄、預言者の活動を続けたとあります(1:3)。しかし実際には、その後エジプトへ連れて行かれ、そこでも予言活動をして死にました。国が滅びる激動の時代に、50年近く神さまに用いられた預言者です。

[1] エレミヤの召命

新共同訳聖書では、1章4節の前に「**エレミヤの召命**」という小見出しがついていますね。この**召命**という言葉は、日本の代表的な辞典「**広辞苑**」(岩波1955年版)、また新しい「**実用新国語辞典**」

(三省堂 1987 年版)には記載されていません。1989 年に講談社から出た「日本語大辞典」に至ってやっと登場します。そこにはこう記されています。「キリスト教用語。神が特定の人を選んで一定の仕事をたくすこと。またその仕事、vocation」。

このように召命という言葉は日本固有の文化にはなかったものでキリスト教用語なのです。聖書には、言葉をもって語りかける神さまと、その語りかけに応答して生きた人間、又それを無視して生きた人間の人間模様が歴史を通じて記されています。

日本語大辞典によりますと、召命とは、1)神が選ぶ 2)特定の人に 3)仕事をたくすという、三つの要素から成っていると説明されています。これをエレミヤ書 1 章に適用すると、「1)主なる神がアナトの祭司ヒルキヤの子エレミヤを選んだ 2)主は彼を生まれる前から預言者に決めていた。3)主は彼に諸国民・諸王国に対する預言者の仕事を託した」ということになります。

エレミヤの冒頭の言葉に注目しましょう。「主の言葉がわたしに臨んだ。わたしはあなたを母の胎内に造る前からあなたを知っていた。母の胎から生まれる前にわたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた。」

この私は偶然にこの世に生まれて、今生きている者なののでしょうか？ 居ても居なくてもかまわない者、つまらない存在なののでしょうか？ こんな者でも親が懸命に愛し、育ててくれた、だからくだらない生涯を送っては申し訳ない、せめて親の恩に報いなければ、と生きる意義を説く人もいます。否、違います。私は偶然この世に現れたのではありません。私を形造り、誕生させ、この世で生きる者にして下さったお方がいらっしゃる。世界の創造主、神さまがいらっしゃる——これが聖書の信仰です。

私を母の胎内に宿し、形造り、育て、この世に誕生させた神さまは、私の生涯にご自分の計画、期待を託して、私を誕生させて下さった。私はその期待を担って今を生かされている——これが青年エレミヤが聞きとった神さまの言葉、「母の胎から生まれる前に、わたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた」だったのです。

ではエレミヤはこの召命を何時、どのようにして明確に受け取ったのでしょうか。内村鑑三はエレミヤを「余の特愛の預言者」と呼んでいます。こう推測しています。「多分、青年エレミヤがアナトテ付近の郊外を独り歩みし時、あるいは古きオリーブ樹の下に独り黙想にふけりし頃、彼の心琴に幾度となく触れし、細きかすかな声があったろう。彼は幾度となく打消さんとせしが、しかしその声は去らなかったであろう。彼は遂に彼の預言者として神の予定されし者であることを、信ぜざるを得ざるに至ったのであろう」。

内村がこの様に自然を逍遙する青年の姿を推測したのは、1 章 11～12 節の言葉によると思われる。「エレミヤよ、何が見えるか。」わたしは答えた。「アーモンド(シャーケード)の枝が見えます。」

「あなたの見るとおりだ。わたしは、わたしの言葉を成し遂げようと 見張っている(ショーケード)。」

「アーモンド(チャーケード)(口語訳では「あめんどろ」)は、パレスチナではすべての木に先駆けて1月の終わりか2月の初めに花をつける木です。私たちが長く暮した北海道の札幌でいえば、雪がまだ積る3月末に、山の麓に咲くコブシの花にあたるでしょうか。万物が眠っている**真冬のさな**かに、早くもあざやかな花を咲かせる準備を始める木の**細い枝に現れる変化**を、エレミヤも観察していたのです。

混沌とした歴史の中で、神さまが独り、ご自身の**裁きと救いの御業**を行われる**時期**を見計らっておられます。神さまは自然の変化を鋭く観察している青年エレミヤに注目されました。そして御自分がこれから成し遂げようとしていることを、この若者に お示しになったのでした。再び神さまは言われます。「何が見えるか。」エレミヤは答えました。「**煮えたぎる鍋**が見えます。北からこちらへ傾いています。」これは、北の強国の攻撃によって、南王国も**滅ぼされる災い**が襲いかかってくるという予告でした。

[2] 何が見えるか

私や山下先生、喜美子や伊藤三恵子さんは、若いときに目白ヶ丘教会で**熊野(ユヤ)清樹**牧師の説教を聞いて育ちました。先生は色々なエピソードを説教の中で繰り返し語られました。「もう何回目だと指折り数える人も居るだろうが」とおっしゃで語られましたから、今でも鮮やかに甦ってきます。そのなかの一つです。

先生が熊本県人吉の小学校時代のこと、習字の時間に受持ちの先生が、柱によりかかりながら外を眺めていました。突然一人の子を呼んで窓のそばに立たせ「**何が見えるか**」と尋ねました。その子は首をかしげるだけでした。「もうよい。席に戻りなさい」。次の子が呼ばれました。「何が見えるか」。その子も首をかしげるだけでした。習字を書いていた子供たちは俄然興味をそそりました。幾人目かに「熊野」と呼ばれました。先生の傍らに立って外を眺め渡しました。「何が見えるか」。いつもながらののどかな田舎の風景です。特別変わった様子はありません。ところが校庭と地続きの**農家の縁先**で、子守さんが赤ん坊を抱きながら、こくりこくりと舟をこいで居眠りをしているのに気付きました。赤ん坊を縁側から下に取り落としたらケガをします。「先生、**危ないです**」。「そうか、行って起こして上げなさい」。熊野少年はとんで行ってその子守さんを起こして、教室に戻って来たそうです。

「何が見えるか」「先生、危ないです」「そうか、行って起こして上げなさい」。皆が皆、**危ない**と気が付くわけではありません。ですから危ないと気付く心は**天与の才**の一つ、神さまから与えられた**賜物**(gift)ではないでしょうか。あめんどろの枝を見ながら、預言者に召されたエレミヤと神さまとの会話と重なるお話ですね。

熊野先生はお父さんを早く亡くしたので、中学校に進まず高等小学校を出て、内務省の衛生試験所で働き始めました。しかし試験管をふるっている毎日の生活が、何か他人の仕事をしているよ

うな気がして、仕方がありません。「自分でなければならない仕事があるはずだ」。こうして牧師になる道を神さまから示されて、東京に出て中学2年に編入し、神学校への道を歩み始めたのでした。

「ああ、わたしは若者にすぎませんから」と尻込みするエレミヤ中にも、既に生まれる前から、「ショーケード」から「歴史を見張っている神さまの眼差し・ショーケード」に気付く賜物が、授けられていたのでした。主は手を伸ばして、エレミヤの口に触れ、言われました。「見よ、わたしはあなたの口にわたしの言葉を授ける。見よ、今日あなたに、諸国民、諸王国に対する権威をゆだねる。抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植えるために」。

神さまからこう言われてしまうと、エレミヤは返す言葉がなくなっていました。小さな村の祭司の息子です。どれ程の学歴の持ち主か。都の神殿や王宮で語るとすれば、貴族出のイザヤとは違い、軽くあしらわれる惨めさを味わうことになるでしょう。彼の尻込みも当然でした。

ところが神さまはおっしゃいます。「わたしがあなたを誰のところへ遣わそうとも、行ってわたしが命じることをすべて語れ。彼らを恐れるな。わたしがあなたと共にいて、必ず救い出す」。そうです。何を語るのか。自分が考えたことを語るのではありません。神さまが語れとお命じになる言葉をそのまま語ることが、**預言者の任務**なのです。

混沌とした時代の流れのなかで、ただ自分の思いのみで安楽に毎日を送っている多くの人々。神さまはどのように歴史を導こうとしておられるのか、その言葉を語る預言者に聞き従うことこそが、私たち人間にとって最も大切ではないでしょうか。

[結] 聖書から神の言葉を聞きとる

日本が戦争に負けた時、学校で教科書の間違いを、先生の指示で、習字の墨と筆で黒く塗りつぶす作業をさせられました。こんなに間違っていたことを学んでいたのかと、愕然としました。時代が変わろうと墨で消されることのない、**本当の真理**を学ばなければならないという思いが、心の底からふつふつとこみ上げてきたことを、今でも忘れません。

軍人になって天皇陛下に命を捧げるという人生の目的を失い、新しい目的をつかもうと、本を読み漁りました。聖書を手にししました。その**聖書**が私を惹きつけました。しかし分からないことだらけ。友人の**教会**に連れて行ってもらいました。説教を聞きながら聖書を読んでいくうちに、私に対して神さまが呼びかける言葉として、聖書に向かい合うように導かれました。聖書から神さまが私に語りかけておられる言葉を聞き、**神の御心に従って生きる信仰**を与えられました。神さまは、私を牧師にお召しになりました。

どう生活したらよいか迷う時に、私たちは**正しい判断を示す言葉**を必要とします。その言葉を聞いて考え、自分の言葉で語りながら、自分の考えがまとまっていきます。そして言葉で決意を表明し、行動を起こします。このように**言葉**で私の**人格が形成され、言葉で私の生き方が綴られていく**ので

す。人間の言葉を聞くことによってすら、私たちは人間として成長していくのですから、**神さまの正しい命の言葉を聞くことが、私たちにはなおさら大切**ではないでしょうか。

私は聖書を読みながら、今どう生きるべきかを示す神さまの言葉を聞き取って従う生活を続けて今日に至りました。本当に幸いな人生を歩んで参りました。特に聖書から聞きとる神さまの言葉をお取次ぎする**牧師の務め**を長くさせていただいておりますことを、心から感謝しています。

「わたしはあなたを母の胎内に造る前から**あなたを知っていた**。母の胎から生まれる前にわたしはあなたを聖別し、諸国民の預言者として立てた」とエレミヤに語られた神さまは、皆さんお一人ひとりにも語りかけておられるのです。

皆さんは、その**語りかけ**をお聞きになっていませんか。今日のスケジュールの中でどうすることが、神さまの**御心**でしょうか。どちらを選ぶべきか、何をなすべきか、聖書を読みつつ、祈って御心を聞いて参りましょう。神さまの**霊、聖霊が私の心に働きかけて**、神さまの言葉を、聖書を通して示してくださいます。

私たちの**人生の違い**——それは一人ひとりに対する神さまの期待、**ご計画の違い**です。貴方ではなければならない**仕事**、貴方にして欲しいと神さまが願っておられる**任務**を、各自が信仰をもって聞きとり、神さまの御心にあるご計画を、実現させて参りましょう。

完